



ワールド・シアター・デイ 2019

カルロス・セルドラ (キューバ)

私が演劇に目覚める前から、巨匠たちはすでにそこにいました。彼らは自分の人生の傷跡に住まいを建て、詩学を創りあげていました。多くは名もなき人や、誰もその名を思い出すことができないような人でした。静寂のなかから質素な稽古場へ、そして観客が湧き返る劇場へ。彼らは働き続け、多くの功績を残し、そしてゆっくりと仕事場を去り、消えていきました。私は、自分の仕事と人生がこうした先人たちの後を継ぐことなのだと理解すると同時に、その伝統が苦悩に満ちた特別なものであることも知りました。私の願うのはただ、再現不可能な瞬間、身振りや啓示的な言葉の真実だけに守られた劇場の暗闇の中で他者と出会う透明な瞬間のみなのだと。

劇場を訪れる観客たちとの出会いの瞬間が私の演劇の国になります。観客は、数時間、数分間を私たちと過ごすため、夜毎に、多様な表情を見せる街のあちこちからやってきます。かけがえのない瞬間が私の人生を作り上げていきます。私は自分自身であることをやめ、自分を心配することをやめ、生まれ変わり、演劇を仕事とすることの意味を理解するのです。それは、はかなく純粋な真実の瞬間を生きることにはほかなりません。舞台の照明の下で、私たちの言葉や行為は真実となり、私たちの最も深いところにある、最もパーソナルな部分を浮かび上がらせます。私と俳優たちの演劇の国はそうした瞬間で紡がれており、そこでは仮面も、レトリックも、自分自身であることへの恐怖も捨て去り、暗闇の中で互いの手を取り合います。

演劇はいつの世も水平です。世界のどこかに演劇の中心があるとか、どこかの街や特別な建物に中心があるなどと言い切れる人はいないでしょう。私の知る限り演劇とは、輪郭を持たない地図の上に生まれる、舞台に関わる人たちの人生と技術が織りなす姿です。演劇の巨匠たちは、再現不能の輝きと美が生まれた瞬間に死んでいきます。自らの価値を保証したり高めたりする証も残さず消えていくのです。演劇の巨匠たちは、それこそが演劇の根本であると知っています。演劇の仕事とは、真実の瞬間、どっちつかずの瞬間、力が漲る瞬間、そして危機的状況での自由の瞬間を創り出すことです。映像や写真などのデータなら残るかも

しませんが、このような記録は巨匠たちの思考をおぼろげに伝えたとしても、観客の無言の反応を記しません。観客は、劇場の中で体験したことが翻訳不能であることを直感的に知り、そこで共有したものが人生そのもの、あるいは人生よりも鮮明なものだと感じます。

演劇はそれ自体が一つの国であり、その領土が世界全域におよぶのだと理解した時、私の中に決意が生まれました。自由が生まれたのです。今いる場所から遠くへ行かなくてもいい。引っ越さなくても急がなくても移動しなくてもいい。そこに観客がいる。大事な仲間もそばにいるのだと。家を一步外に出れば、不透明で、見通しのきかない日々の現実が待ち構えています。動かずともオデュッセイアかアルゴナウタイの壮大な旅を創れるのです。私たちは動かぬ旅人です。現実世界の密度や硬度を加速度的に変えて、ある瞬時へ、ある一瞬へ向かいます。自分によく似た人々との一回限りの邂逅へと向かいます。これは彼らに、彼らの心に、彼らの世界に向かう旅です。私たちは彼らの内面を旅し、感情を旅します。私たちが働きかけることで目覚め、動き出す彼らの記憶を旅します。旅は猛スピードで進みます。誰もその速度を測ることも、静止することもできませんし、その正確な規模を割り出すこともできません。私たちの旅は、同胞の想像世界を貫く旅です。旅は種にもなります。遠い土地から、観客の中にある市民としての意識や道徳観、人間観に撒かれる種。だから私は動かず、家にいます。親しい人たちに囲まれて、のんびりくつろいでいるかのように、昼も夜も働き続けます。なにしろ、速度の秘密が私の掌中にあるのですから。

翻訳：吉川恵美子／藤浪京

Translation: Yoshikawa Emiko / Fujinami Miyako